三遠南信ふるさとの文学

―作家とその作品―

「豊川より石巻山を望む」　豊橋市美術博物館所蔵

第１５回「三遠南信地域資料展」

と　き　　平成２４年2月4日（土）～3月4日（日）
　　火～金曜日　午前９時３０分～午後７時
　　土・日・祝　午前９時３０分～午後５時
　　休　館　日　毎週月曜日と2月２４日（金）

ところ　　豊橋市中央図書館　２階展示コーナー

入場無料

開催にあたって

三遠南信地域にゆかりのある作家は数多くいますが、私たちは果たして何人の名前を挙げることができるでしょうか。懐かしい作家や、名前だけは聞いたことのある作家、初めて知った作家など人それぞれに異なると思います。

東三河（豊橋）・遠州（浜松）・南信州（飯田）地域は、それぞれ特色ある風土や文化をもっています。作家はその生い立ち、育った土地の風土や文化に大きく影響を受けるといわれています。

ここでは、そうした三遠南信地域にゆかりのある代表的な物故作家 14 人と、愛着のあるふるさとにつながる作品を取り上げ、図書資料を中心にパネルなどによりその一端を紹介いたします。

この三遠南信資料展**「ふるさとの文学」—作家とその作品—** が、郷土の作家の人となりや、その作品を書いた背景を知ることにより、いっそう郷土の文学を愛するきっかけとなれば幸いです。

平成２４年２月

目　　次

三河地方にゆかりの作家たち

小栗風葉 ・・・・・・・・・・ １，２
賀川豊彦 ・・・・・・・・・・ ３，４
佐々木味津三 ・・・・・・・・・・ ５，６
丸山　薫 ・・・・・・・・・・ ７，８
大阪圭吉 ・・・・・・・・・・ ９，10

遠州地方にゆかりの作家

鷹野つぎ ・・・・・・・・・・11，12
井上　靖 ・・・・・・・・・・13，14

南信州にゆかりの作家

柳田国男 ・・・・・・・・・・15，16
椋　鳩十 ・・・・・・・・・・17，18

その他の主な作家たち ・・・・・・・・・・19，20
描かれたふるさと ・・・・・・・・・・21，22
参考資料一覧 ・・・・・・・・・・23，24

【 おぐり　ふうよう 】

小栗風葉

１８７５（明治８）年～
１９２６（大正１５）年

豊橋市花田町に16年間暮らした、明治・大正時代の代表的な作家。
ベストセラー作品『金色夜叉』の著者尾崎紅葉亡き後、その続篇の『終篇金色夜叉』を執筆したことで有名。
代表作『青春』は、豊橋も登場し、豊川や石巻山などの描写がみられる。

小栗風葉

『小栗風葉作品集』
小栗風葉をひろめる会／編・発行

生い立ち

愛知県知多郡半田村（現半田市）の薬種商「美濃半」を営む父半左衛門、母きぬの長男として生まれた。本名を磯平といい、初孫を見た祖父甚六は大喜びで、たいそう可愛がったという。

「風葉が祖父から享（う）けたものは多い。楽天的な性格の一面もそうだといえるし、何よりも重大な、風葉を文学者にさせた「小説好き」の素質も、「祖父の遺伝ではなかろうか」と、風葉自身が語っているのである。」（『評伝小栗風葉』より）

しかし、後に風葉は豊橋の素封家加藤家の娘籌子（かずこ）と結婚して婿養子となったため、家業を継いだのは三男であった。生まれ育った半田は、衣ケ浦湾に面した港町であり、酒造地としても有名であった。出世作『亀甲鶴』は、この半田を舞台とした作品である。

野島金八郎との出会い

半田の小学校を卒業後、知多郡高等小学校衣ケ浦学校に進んだ風葉は、作文が最も得意で、成績も優秀であった。こうした風葉の文芸的素質を見抜いて激励していたのが、同校の英語教師野島金八郎であった。野島は、風葉に文学に進むように勧めた教師であり、以前、田山花袋に文学的指導をした人でもあった。

また、上京してから錦城中学校への入学を世話したのも野島金八郎であった。

『小栗風葉資料集成』
遠藤一義／編・著
小栗風葉をひろめる会／発行

豊橋公園内の三の丸会館裏にある小栗風葉の文学碑

小栗風葉碑

當も無く小迷ひ歩いて居る内に、村の外れの豊川堤へ出て了つた。爰からは石巻山の嶮峭な姿が眞面に麓の生根まで見えて、其の少し北寄に、大人しい薄藍の本宮山が朝日を浴びてスツキリ聳つて居る。

「青春」より

尾崎紅葉に入門

当時文壇の花形であった尾崎紅葉の作品を愛読し、紅葉に憧れていた風葉は 1892（明治25）年、とうとうその門下生となった。

紅葉は、門下生で玄関番をしていた風葉を厳格にしつけたが、内には温かい慈愛を含み、親身になって面倒をみてくれた。風葉が擬似コレラに罹ったときには、親から見放されていた風葉をわが子のように看病したという。

新進作家として文壇登場

1896（明治 29）年に入ってから、『寝白粉』『亀甲鶴』などを発表、その後も数多くの作品を書いたが、特に紅葉の死後未完となっていた『金色夜叉』の続篇を『終篇金色夜叉』として完成させたことは有名である。これは読者からの要望に応えてのものであったが、続けざまに増刷しても追いつかないほどの売れ行きであったという。

豊橋時代

風葉は、東京で作家活動をしていたが、1910（明治 43）年に妻の実家がある豊橋市に住まいを移した。代表作の『青春』は、豊橋を舞台として書かれた作品である。明治中期には女学生が出現して珍しがられたが、『青春』はその時代を反映した女学生をテーマとしたものであった。豊橋公園内の三の丸会館裏にある文学碑（上写真）には、『青春』の一節が刻まれており、石巻山や本宮山の情景が描写されている。

なお豊橋市中央図書館は、風葉自筆の原稿他の資料を所蔵している。

代　表　作　品

著　書　名	刊　行　年
寝白粉	1896（明治 29）年
亀甲鶴	同上
恋慕ながし	1898（明治 31）年
政鶩	1899（明治 32）年
鬘下地	同上
青春	1905（明治 38）年
恋ざめ	1907（明治 40）年
終篇金色夜叉	1909（明治 42）年

花田町に建つ風葉の墓碑（右）と加藤家代々の墓（左）

【 かがわ　とよひこ 】

賀川豊彦

１８８８（明治２１）年～
１９６０（昭和３５）年

ノーベル賞候補にも挙げられたほど世界的に名の知れた世界平和提唱者。
農民組合を組織したり、生活協同組合の生みの親とも言われたりした。
関東大震災のとき直ちに救援活動をし、ボランティア活動のさきがけとなった。
豊橋時代の経験が、彼の生き方に大きく影響。

『日本キリスト教史における賀川豊彦』
賀川豊彦記念松沢資料館／編
新教出版社／発行

『一粒の麦』
賀川豊彦／著　賀川豊彦『一粒の麦』を再版する会／発行

生い立ち

兵庫県神戸市で、回漕業者の父賀川純一と芸妓の母かめの間に生まれた。4 歳のときに父が、5 歳のときに母が亡くなったが、生母が正妻ではなかったため、姉とともに徳島の本家に引き取られた。

旧制徳島中学時代、13 歳のときに結核と診断されたが、宣教師 C・A ローガンに英語を学び、16 歳のときに教会に導かれ H・W マヤスより洗礼を受けてクリスチャンとなった。以後、※物心両面の援助を、マヤスから受けることとなった。

賀川を信仰に導き暖かい保護者となったのは、マヤス夫妻であった。後に、賀川は「マヤス先生は信仰の父です。私が貧乏していたときに、いつも金をもらいに行ったのはマヤス先生でした。17 のときに 40 日間抱いて寝てもらい、19 のときに肺病で倒れているときにも蒲郡の猟師の家の畳のないところで、2 日も一緒に筵（むしろ）の上で寝てくれたのもマヤス先生です。・・・」と述懐している。蒲郡への転地療養は、当時豊橋に在任していたマヤスの勧めによるといわれ、また神戸神学校ではマヤスは教授であったというように深いつながりを持っていた。（『三河と賀川豊彦』より）

賀川は、中学時代より文才を現しており、ラスキンの『胡麻と百合』を翻訳し、また明治学院高等部在学中には、『世界平和論』を徳島毎日新聞に連載している。

1907（明治 40）年 3 月、明治学院高等部予科に在学中、新設の神戸神学校への転校を決意、開校までの間愛知県の岡崎や豊橋で伝道の手伝いをしていた。

賀川の生き方に大きな影響を与えたといわれる長尾巻ゆかりの旭町教会（現豊橋中部教会）

※H・Wマヤス…アメリカ人宣教師で1897年来日。岡崎、徳島、豊橋を経て、1909年から神戸で伝道。徳島時代には義兄C・Aローガンと協力して徳島教会の建設に当たり、1904年には賀川豊彦を導いて授洗した。後に、神戸神学校の校長となった。

豊橋時代

同年 7 月、豊橋市東八町の豊橋教会に移ったが、ここでの長尾巻牧師との出会いがその後の生き方に大きく影響を与えることとなった。賀川は、札木町辺りでもっぱら路傍伝道を行ったようである。ところが、ここで発熱喀血したため、長尾家の人々は死線をさまよう賀川を親身にまさる看病をした。このときの経験とその後の活動を書き綴ったのが、名著『死線を越えて』である。

豊橋滞在はわずか 1 か月余りでしかないが、自分が世話になった長尾巻牧師の生き方から強烈な何かを与えられたことは確かであり、またこのことが、2 年後の神戸の貧民窟新川入りに大きな影響を与えたともいわれる。

『一粒の麦』を読んで感動した豊橋市向山町の笠原氏が津具に建てた記念碑

1936（昭和 11）年、長尾巻牧師召天 3 周年に行われた記念講演会での賀川の発言について『青春の賀川豊彦』の中に次のように記されている。

「……信仰生活 49 年の間、聖日を数えること二千百回、その間ただの一度も守らなかった日はなかった。彼は貧乏のどん底にいながら、愚痴、不平を一度だって彼の口から聞いたことがなかった。また彼が怒ったのを見たことがなかった。彼の行いは満点であった……。

自分が日本中の牧師で一番感心し、自分が一番感化を受けたのは長尾巻である。」

蒲郡や津具にも

その後、蒲郡や津具でも転地療養をしたが、後年大ベストセラーとなった『一粒の麦』は、このときの経験がもととなっている。

蒲郡での療養期間は 1908（明治 41）年 1 月から 9 月までであり、場所は蒲郡市竹島町であった。この療養中に、後に『死線を越えて』として残る小説の前半『鳩の真似』を書いたといわれている。その 12 年後、神戸新川のスラム救済活動の経験を後半に書き足したものを『死線を越えて』として出版し、これも空前のベストセラーとなった。

代　表　作　品

著　書　名	刊　行　年
精神運動と社会運動	1919（大正 8）年
死線を越えて	1920（大正 9）年
自由組合論	1921（大正 10）年
壁の声きく時	1924（大正 13）年
一粒の麦	1931（昭和 6）年
農村社会事業	1933（昭和 8）年
新協同組合要論	1947（昭和 22）年
宇宙の目的	1958（昭和 33）年

標高 700 メートルの涼しい高原である津具にて、賀川は療養をしながら伝道活動を行っていたようである。現在、上津具の下町交差点には『一粒の麦』を記念する記念碑があり、下津具保育園前には賀川が揮毫（きごう）した村井與三吉の記念碑がある。村井は下津具校で教鞭をとりながらキリスト教伝道にも心血を注いだ人であり、賀川にとって大きな影響を与えた先生であった。『一粒の麦』の中の村野先生とは、この村井がモデルである。『一粒の麦』は貧しかった農村を更生させる様子が描かれたすばらしい作品として評判となり、映画化もされた。

【 ささき　みつぞう 】

佐々木味津三

１８９６（明治２９）年～
１９３４（昭和９）年

北設楽郡津具村（現設楽町）生まれ。
生活のため大衆小説を多く手がけたが、病弱のため 37 歳という若さで死去。
人気を博した『旗本退屈男』『右門捕物帖』など、映画化された作品が多い。

佐々木味津三
設楽町教育委員会所蔵

『旗本退屈男』
佐々木味津三／著
実業之日本社／発行

生い立ち

北設楽郡津具村に父滋三、母イチの三男として生まれた。本名は、光三（みつぞう）。家業は、酒の醸造と白木商、その他呉服雑貨や米味噌醤油などを扱う商家であった。

尋常小学校高等科を卒業後、名古屋の愛知県立第一中学校（現旭丘高校）へ入学、成績は組長を務めるほど優秀であった。しかし、18 歳の時に父を亡くしたことで精神的に大きなショックを受け、蒲郡で療養生活をすることになった。読書好きで、この頃 1 日に 5 冊読まなかった日はないほどであったという。

20 歳の時には病気も癒え、上京して明治大学に入学、卒業後雑誌「大観」の記者となった。1918（大正 7）年秋に結婚。処女作といわれる『葦毛の馬』は、この年「大観」に掲載された作品である。

この頃は、窮乏生活と闘いながらも仕事に激しい意欲をみせ、ユーモア小説、少女小説、童話など多岐にわたる作品を書いた。

1923（大正 12）年、報知新聞に載った『呪わしき生存』が反響を呼び、菊池寛が「現実の生々しい題材を反抗的な、ひねくれたような調子で力強く描き出した力作である。新鮮な力と熱が溢れている。」と評したことから、漸く作家としての存在を認められるに至った。（『佐々木味津三年譜・作品年表』より）

設楽町下津具に残る生家

純文学から大衆小説へ

1926（大正 15）年、31 歳のとき窮乏時代に快く援助してくれていた長兄が亡くなった。そのため、弟妹 3 人と遺児 5 人の養教育を託され、同時に兄の抱えていた多大な負債をも引き受けることとなった。

しかし、全財産をなげうってもその負債が果たせぬことを知り、収入の少ない純文学を諦め、大衆小説に転向

下津具にある味津三の墓

映画「右門捕物帖」のポスター
設楽町教育委員会所蔵

する覚悟を決めた。

同年7月、初めて中篇の大衆小説『直参八人組』を書いた。世間では彼の転向を嘲笑する人もいたが、決意は変わらなかった。

『右門捕物帖』『旗本退屈男』が大好評

1928（昭和3）年、最初の『右門捕物帖』を発表した。一篇の読切小説のつもりだったのが思わぬ好評で、引き続き書くことになった。

そのため、この年には『右門捕物帖』だけでも10篇、長篇『旗本風流陣』、中篇『謎の人形師』など大衆小説を次々に執筆し、仕事一途の生活となった。『右門捕物帖』は、この後1932（昭和7）年6月発表の38話まで続いた。

1929（昭和4）年には『旗本退屈男』を発表、これも1篇だけのつもりだったのが好評だったため続篇を書き、遂にはシリーズものとなった。

旗本退屈男　第五話「三河に現れた退屈男」

（前略）

「いいえ、只の百姓でございます。家代々の水呑み百姓でございまするが、三河者は権現様の昔から、意地と我慢と気の高いのが自慢の気風でございます。それゆえ頂きましては―。」

「いや、うれしいぞ、うれしいぞ。近頃ずんとまたうれしい言葉を聞いたものぢゃわい。三河者は意地と我慢と気の高いが自慢とは、五千石積んでもきかれぬ言葉ぢゃ、なにをかくそう、身共の先祖も同じこの国育ち、そう聞いては意地になっても取らせいではおかぬ。早う手を出せ。」（後略）

（退屈男が理不尽にも武士に馬を切られてしまった百姓に、代わりの馬を買うお金を渡そうとする場面）

映画で一世を風靡（ふうび）

やがて、『右門捕物帖』は46本、『旗本退屈男』は30本が映画化されて、当時は誰もが知るところとなった。後者は、額に刻まれた三日月形の刀傷がトレードマークである早乙女主水之介が主人公である。

映画では、右門は嵐寛寿郎、退屈男は市川右太衛門が演じたが、右太衛門が亡くなった1999（平成11）年の中日新聞は、「天下御免の旗本退屈男市川右太衛門さん（92歳）死去」と報じたほどのはまり役となった。

1932（昭和7）年、多忙と不規則な生活で体力は衰えていたが、仕事の合間をぬって久しぶりに帰郷、これが最後の郷里でのひとときとなった。

代　表　作　品

著　書　名	刊　行　年
葦毛の馬	1918（大正 7）年
呪わしき生存	1921（大正10）年
地主の長男	1926（大正15）年
直参八人組	1928（昭和 3）年
右門捕物帖	同上
謎の人形師	1929（昭和 4）年
旗本退屈男	同上
青春群像	1933（昭和 8）年

37歳という若さで

気力で仕事を続けてきた味津三も、1934（昭和9）年2月、看護のかいなく37歳の若さで永眠した。現在でも、故郷の津具には生家が残っている。

【 まるやま　かおる 】

丸山　薫

１８９９（明治３２）年～
１９７４（昭和４９）年

日本の現代詩に多大な業績を残した詩人。
韓国の警視総監や島根県知事を勤めるほどの高級官僚だった父親の仕事の関係で幼少の頃からあちこちを転々とする。
12 歳のときに豊橋市に住む母方の祖父の家に移った。
49 歳のとき再び豊橋の地に移り、75 歳で亡くなるまで、豊橋市を中心に活躍していた。

丸山　薫

『丸山薫詩集』
丸山薫／著　　昭南書房／発行

生い立ち

大分市荷揚町の県庁官舎で、父重俊、母竹子の二男として生まれた。父が官僚であったためあちこちの官舎を転々とし、5歳のときには韓国・京城にも渡ったことがある。

しかし、1911（明治 44）年に父が病気で亡くなったため、母方の祖父の家がある豊橋市に移り、2 学期から八町小学校に通学した。小学校だけでも 5 校も変わったため、なかなか友達ともその地域にも馴染めなかったという。

練習船

海の好きな少年らは
いつかは練習船に乗るであろう
バナナの実る南の島へ
風に翼張りとんでゆくであろう
恋することを忘れた一生を
波のまにまに送るであろう
やがてロビンソンのように年老いてから
人形のような乙女を娶るであろう

海への強い憧れ

その後、愛知県立第四中学校（現時習館高校）に入学してから、米窪太刀雄の『海のロマンス』を読んだ薫は、海や船へ強い憧れを抱くようになった。そのため、中学を卒業後東京高等商船学校（現東京商船大学）を受験したが失敗、翌年再度挑戦して入学することができた。しかし、病気のためやむなく退学することとなった。

夢破れ三高へ

傷心の薫は、自分の進むべき方向を失い、しばらくあてもなく過ごしていたが、やがて母の勧めもあって 1921（大正 10）年、第三高等学校（現京都大学）に入学。そこで知り合ったのが三好達治や桑原武夫らであり、特に三好達治とは親密となった。

その後、東京帝国大学国文学科に入学したが、当時のことを『全詩集大成現代日本詩人全集 11』の中で次のように記している。

「作品を書き始めたのは高等学校卒業前 1 年のころからで、当時、一高出身の東大生によ

高師緑地内にある丸山薫の文学碑

っておこされた第九次「新思潮」に参加して、約2カ年にわたってロマンティックな短い散文のいくつかを発表した。小説のつもりで書いたのだが、同人仲間からも世間からも詩としてしか認められず、自分でも気付くところがあって、同様のモチフを詩の形式にして、たまたま百田宗治氏の主宰する詩誌『椎の木』に発表しつづけた。後に『幼年』という詩集に収めた作品がそれらである。」

1932（昭和7）年、33歳のときに出した第一詩集は、『帆・ランプ・鴎』といい、海に憧れた詩人にふさわしいものであった。その詩の中にあふれた薫の心は、多くの人々を感動させ、詩人として名を知られることとなった。

その後、堀辰雄や三好達治らと雑誌「四季」を発刊。ここに次々と詩人たちが加わり、ついには昭和の新しい詩を起こす大きな集団となった。（『愛知に輝く人々4』より）

1945（昭和 20）年山形県の月山のふもとの岩根沢へ疎開、そこで教師となった薫は、自然や子どもたちと触れ合う中で、その喜びを詩に綴った。

豊橋市にて

1948（昭和 23）年、再び豊橋に居を移して愛知大学の講師（後に教授）となり、やがて多くの人に惜しまれながら75歳でその一生を終えるまで、詩の創作はもちろん、講演活動や放送関係への出演など大活躍であった。

豊橋市では、薫の業績を記念して1994（平成6）年「丸山薫賞」を設立し、毎年現代詩集を公募してその優秀作品に授賞している。

母の傘

お母さん
あなたが亡くなられてから
きょうで二十日目
山の村には侘しく
秋の雨がふっています

その雨の中を
あなたが形見として遺された
あの小さな傘をさして
私は生活のために出かけます

年寄られてから
いつも外出には手から離し給わず
はるばるとこのさびしい北の山国まで
死出の旅にさして来られた
老人用の黒い絹張りの傘！

お手製のふくろにしまわれた
少女のパラソルのように
柄の短いコウモリ傘！

それを翳せば
雨も私の頭と肩にはふらず
私はあなたと一緒にいるようです

そのうえ　未だ私が子供で
あなたが若かったむかしから
媼となって　ひっそりと暮されるまで
始終　私達の気持に投げかけていた

あの柔かな慈愛の陰にかくれるようで
私の胸はせつなく温まり
甘い思い出にうるむのです

お母さん
私はいま　この小さい傘の中から
現世にしぶく冷たい雨の脚を眺め
雨にけぶる遠い山の紅葉を眺めます

代表作品

著書名	刊行年	著書名	刊行年
帆・ランプ・鴎	1932（昭和 7）年	丸山薫詩集	1943（昭和18）年
鶴の葬式	1935（昭和10）年	みなみの海	同上
幼年	同上	水の精神	1947（昭和22）年
蝙蝠館	1937（昭和12）年	蟻のいる顔	1973（昭和48）年

【 おおさか　けいきち 】

大阪圭吉

１９１２（明治４５）年～
１９４５（昭和２０）年

戦前における数少ない本格探偵小説作家。
新城市の旧家「鉈屋（なたや）」の分家である旅館「鈴木屋」に生まれ、
豊橋商業学校を３年のとき中途退学。
東京の大学を卒業後、新城に戻って執筆活動を続けた。
フィリピンのルソン島にて、33 歳で戦病死。

大阪圭吉
鈴木壮太郎氏所蔵

『ここに家郷あり』
大阪圭吉／著　新興亜社／発行

生い立ち

新城市本町で数代続く旅館「鈴木屋」に父良平、母ことの長男として生まれた。本名は、鈴木福太郎といった。

新城小学校を卒業後、豊橋商業学校（現豊橋商業高校）へ進んだが、3 年で中途退学した。その理由は定かではないが、一説には、南米に憧れて 3, 4 人の友達とブラジル渡航を企てたためとも、また左翼思想に興味を抱いたことが学校で危険視されたためともいわれる。

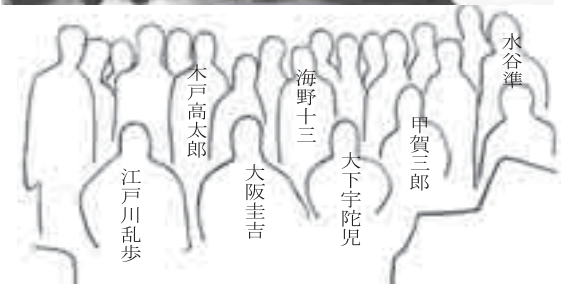
心機一転、上京して勉学に打ち込んだ圭吉は、日本大学商業学校を 1931（昭和 6）年に卒業した。その年、坂上蘭吉のペンネームで「中央公論」の懸賞小説に応募したが落選。翌年には、「日の出」の懸賞募集に『人喰い風呂』を投稿し、こちらは佳作入選したが活字化はされなかった。

学業を卒（お）えた圭吉は故郷の新城に戻り、それ以来ほとんどの探偵小説は故郷で執筆された。

探偵作家「大阪圭吉」としてのデビュー

圭吉の探偵作家としての出世作は、1932（昭和 7）年「新青年」に推理作家甲賀三郎の推薦を受けて掲載された『デパートの絞刑吏』であった。ペンネームは、末弟からの手紙に「大阪より　圭次」とあったことに由来するといわれている。（『大阪圭吉探偵小説選』解題より）

その後、「新青年」に『カンカン虫殺人事件』『白鮫号の殺人事件』『気狂い機関車』を発表、また 1936（昭和 11）年にはこれらをまとめた第 1 著書『死の快走船』を刊行した。同書には江戸川乱歩、甲賀三郎が序文を寄せ、出版記念会が開かれた。さらに、同年には『三狂人』『動かぬ鯨群』などの秀作を発表している。



『死の快走船』出版記念会
（昭和 11 年 6 月 3 日）
鈴木壮太郎氏所蔵

『江戸川乱歩と13人の新青年』
ミステリー文学資料館／編
光文社／発行

江戸川乱歩も期待

江戸川乱歩は、評論『日本の探偵小説』で圭吉のことを次のように書いている。

「この作者も小栗虫太郎と同じく登場以来日浅く、作量も「新青年」誌上ではわずかに 5,6 篇に過ぎないけれど、探偵小説を離れがちな日本の作家の中にあって、純粋の探偵小説のみを目がけて精進を続けている意味でむしろ特異の作家と云うべく、理智探偵小説というものを、その本当の意味で摑んでいる点では、先輩作家の間にも多く類例がない程だと思う。（中略）純粋理智を愛しながら、充分大衆性をも備えているこの作者には、将来の大成を期待していいのだと思う。」

33歳、ルソン島にて戦病死

しかし、1938（昭和 13）年以後時代が戦争一色になるとともに作品がユーモア小説や防諜小説へと変わっていった。

その圭吉も、やがて 1943（昭和 18）年に召集され、満洲に渡った。その後フィリピンへ転戦し、1945（昭和 20）年ルソン島で戦病死した。33 歳の若さであった。

『大阪圭吉探偵小説選』
大阪圭吉／著
論創社／発行

戦後に再評価

1970（昭和 45）年に、『三狂人』が『新青年傑作選Ⅰ　推理小説編』に採録された頃から、徐々に再評価の気運が高まっていった。その決定的な役割を果たしたのは鮎川哲也で、「小説推理」に『幽霊妻』（遺稿）の掲載を遺族に勧め、また、新城市へ夫人と長男を訪ねてインタビューを行い、『人間・大阪圭吉』をまとめている。鮎川は、その後も『とむらひ機関車』、『闖入者』、『気狂い機関車』など次々と採録した。（『大阪圭吉探偵小説選』より）

また、1971（昭和 46）年には、県立時習館高校の文化祭で《掘り起こす推理の鬼才「大阪圭吉展」》と題してその人と作品が紹介された。

圭吉没後 65 年経った 2010（平成 22）年、横井司監修『大阪圭吉探偵小説選』が刊行されたことから、その作品の持つ魅力が現代でも通用することがわかる。

現在、新城市では圭吉の長男夫婦が健在で墓を守っている。

代　表　作　品

著　書　名	刊　行　年
デパートの絞刑吏	1932（昭和 7）年
気狂い機関車	1934（昭和 9）年
とむらひ機関車	同上
灯台鬼	1935（昭和 10）年
闖入者	1936（昭和 11）年
死の快走船	同上
三狂人	同上
動かぬ鯨群	同上
坑鬼	1937（昭和 12）年

【 たかの　つぎ 】

鷹野つぎ

１８９０年（明治２３）年～

１９４３年（昭和１８）年

浜松市が生んだ近代の女流作家。
結核病で約 20 年間も療養生活を送りながら執筆活動を続けた。
子どもは８人中５人（最終的には６人）を事故や病気で亡くした。

鷹野つぎ

浜松時代

つぎは、浜名郡浜松町下垂町（現浜松市中区尾張町）に父岸弥助、母なをの二女として生まれた。本名を次といい、家業は油雑貨商、兄３人、姉１人、妹３人の８人兄弟であった。

浜松町立浜松尋常小学校を経て浜松女子尋常高等小学校高等科へ進み、1904（明治 37）年には浜松町立浜松高等女学校（現浜松市立高校）に入学した。

母校浜松市立高校にある鷹野つぎの「ふるさとよ　浜松…」の文学碑

幼いときから読書好きの文学少女であったつぎは、19 歳の頃には文芸雑誌へ小説を投稿していた。

この頃、鷹野弥三郎（長野県佐久郡北牧村出身）という新聞記者と知り合い、弥三郎との新生活を名古屋で始めたのは 1909（明治 42）年、つぎが 20 歳のときであった。当時の浜松の風習としては、女の学問は女らしからぬ女をつくるものと思われていた時代であった。

地方時代　（名古屋、豊橋、沼津、福島）

名古屋新聞に勤務の弥三郎との名古屋での暮らしは、1912（明治 45）年２月までの３年半であり、その間に長男正弥が生まれた。

同年 3 月、弥三郎の転勤により豊橋支局へ移り、一家は約 2 年半豊橋で生活をした。この間、二男次弥、長女参弥子が生まれたが相次いで亡くした。

1914（大正３）年秋、弥三郎が報知新聞社に入社したため、転勤により沼津や福島、東京へと転居した。

『悲しき配分』
鷹野つぎ／著
不二出版／発行

東京時代

1917（大正６）年東京に移ったとき、つぎは 28 歳であった。それからの 27 年間が、東京という地の利を得てつぎの作家としての名が世に出た時代であった。

やがて島崎藤村と知り合ったつぎは、文芸誌「処女地」に同人

として数々の短編を掲載した。

1922（大正 11）年から毎年のように作品を発表するようになり、新進の女流作家として徐々に文壇の注目を受けるところとなった。

しかし、1923（大正 12）年 9 月の関東大震災を境に、つぎの運命は暗転する。弥三郎の勤める時事新報社が震災で全焼し、弥三郎は退職を余儀なくされたばかりか、翌年には、つぎ自身が結核に倒れ、以後死に至るまで療養生活を送りながら文筆活動を続けることになった。

また 8 人の子どものうち 5 人が夭折（ようせつ）し、夫の度重なる失業や窮乏生活など、苦労の連続であった。しかし、そんな中でもつぎは多くの作品を発表していった。

『子供と母の領分』
鷹野つぎ／著
古今書院／発行

代表作品

数ある作品の中で、故郷浜松を舞台としたものに、『四季と子供』という随筆がある。序に書かれているように「幼いころの思い出として、七、八歳から十歳前後までの私の記憶を辿ってみた。」作品であり、つぎが子供のころの浜松の生活や行事がわかる美しい作品である。

作品中「ひづるしい（眩しい）」「あたける（乱暴する）」などの方言（遠州弁）が多く遣われており、それは三河弁とも共通する言葉であるところが興味深い。また「豊橋市に近い牛久保の伯父様」という人物が登場する点からも、当時から遠州と三河の交流が深かったことが窺われる。

『鷹野つぎ著作集　第二巻』
鷹野つぎ／著
谷島屋／発行

代　表　作　品

著　書　名	刊　行　年
悲しき配分	1922（大正 11）年
真実の鞭	1923（大正 12）年
ある道化役	1924（大正 13）年
子供と母の領分	1935（昭和 10）年
幽明記	1940（昭和 15）年
四季と子供	同上
女性の道途	1942（昭和 17）年
娘と時代	1944（昭和 19）年
春夏秋冬	同上

※　『娘と時代』『春夏秋冬』は、
つぎが亡くなってから発行。

1922（大正 11）年出版の小説集『悲しき配分』には、つぎの師事した島崎藤村が序文を寄せている。

つぎの作風について、臼井吉見は、「家庭の主婦が、筆を執り、身辺を観察記録したといったふうのものである」といい、『新潮日本文学小辞典』は、「冷徹な観察と緊密で硬質的な表現をもって、人間生活と心理の陰影を彫り深く描いている」と紹介している。

1973（昭和 48）年、文学碑が母校である浜松市立高校の校庭に建てられた。それには「ふるさとよ浜松　はままつは　わがふるさと・・・なつかしのはままつ　思いは馳する　わがふるさと」と刻まれている。

【いのうえ　やすし】

井上　靖

１９０７（明治４０）年～
１９９１（平成３）年

幼少期を静岡県の湯ヶ島で、また青年期を浜松や沼津で過ごした芥川賞作家。
豊橋や浜松を中心とした地域を懐かしく思い描いた作品がある。

受賞した各賞		
	芥川賞	読売文学賞
	毎日芸術大賞	日本文学大賞
	野間文芸賞	川端康成文学賞
	読売文学賞	文化勲章

『群像日本の作家 20　井上靖』
高橋英夫／他著　小学館／発行

『しろばんば』

『幼き日のこと』（随筆）の中にも記述あり

井上靖は、父親が軍医であったためあちこちを転々としている。生まれは北海道の旭川だが、翌年母の郷里で本籍のあった静岡県の湯ヶ島へ移り、幼少時代をそこで過ごした。

靖にとって故郷湯ヶ島が特別なつかしいところであったことは、『しろばんば』という自伝的作品からもわかるところである。これは、主人公伊上洪作が小学校に入学するところから、6 年生の 1 月に浜松に転居する直前までを描いている。この中には、洪作が豊橋を訪れる場面があるが、実際に靖も満 6 歳と満 8 歳のときに祖母かのと来豊している。当時、父は第十五師団軍医部一等軍医として豊橋に母と妹と共に赴任していた。しかし、靖は伊豆湯ヶ島の祖母（実は曾祖父の愛人で、血はつながっていない）にあずけられていた。

作品の中で豊橋はガス燈が灯り、人力車が走る大都会として描写されている。また老舗菓子店の黄色いゼリーを母といっしょに食べたときの思い出が描かれている。この作品では、叔母の死と祖母の死とが、それぞれ前編と後編のクライマックスに配置され、洪作少年の成長の過程が跡付けられている。児童でも読める代表作品の一つである。

『しろばんば』
井上靖／著
中央公論社／発行

浜松時代

『帽子』『過ぎ去りし日々』

浜松時代のことを、靖は『帽子』に次のように書いている。

「私は郷里の小学校を卒業しなかった。六年生の三学期の初めに祖母が亡くなったので、否応なしに父の任地浜松に赴いて、そこの小学校にはいらなければならなかった。私は小学校の最終学年の学期を両親の許から市内の小学校に通ったのである。その頃、といっても、大正十年頃であるが、中学校の入学試験は何人かに一人の割合で、その難しさは今日と余り変らなかった。浜松の小学校では、中学校の入学試験に備えて毎日のように補習授業があり、生徒たちの学力はそれまで田舎でのんびりやって来た私などとは大きい隔たりがあった。三月に中学（現浜松北高校）の入学試験を受けたが、

『孤 猿』
井上靖／著
中央公論社／発行

私は落第した。」

作品の中に出てくる靖の入学した小学校は、浜松尋常高等小学校（現浜松市立元城小学校）である。中学校の受験に失敗した靖は、その後「私は今考えてみて、自分の一生で本当に真剣になった時期があったとすれば、この浜松での１年間ではなかったかと思う」（『帽子』より）、という記述もあるほど勉学に打ち込んだようである。

「家は町中にあったが、私は毎日 30 分ほどの時間をかけて、鹿谷公園という丘の公園を突っ切って通学した。雨が降った時だけ、途中から郊外電車に乗った」（『過ぎ去りし日々』より）と回想している。

また、「晴れた日は、現在の浜松市立文芸館のあたりの細い小道を足早に駆け抜けて行き、雨天には、浜松鉄道（株）の通称奥山線（軽便鉄道）に乗った。」と『井上靖　生誕百年』の中に記されているが、当時靖が浜松の町の中で生活していた様子が眼に浮かぶようである。

『カマイタチ』『孤猿』

この２つの作品にも浜松時代の様子が描かれている。詩『カマイタチ』では「学校へゆく途中に犀ケ崖という小さな古戦場があった。昼でも樹木鬱蒼とした深い谷で、橋の上からのぞくと、谷底にはいつも僅かな溜り水が落葉をひたしていた。」と、浜松の犀ケ崖（さいががけ）という土地が舞台となっている。また『孤猿』には、浜松中学時代の強い思い出として残っている体操教師が「石村東平」として登場している。「孤猿」というのは、この体操教師の俳号であり、この教師は浜松中学の名物教師（花井先生）であった。

併し、私が二年に進級した時、上から落第して私たちの級へ入ってきた生徒が、最初の体操の時間に石村東平が一応整列している生徒たちの前に現れるや、

「先生は俳句の号は何ですか」

と訊いた。石村東平はまさに号令をかけようとしていた矢先、思いがけない質問で虚を突かれた形だった。私たちはどうなるかと固唾を飲んでしんとしていた。（中略）

「わしの俳号を知りたいのか？わしは孤猿と号している。孤独の孤に猿、ひとりぼっちの猿のことを言う。猿にも愚劣極まる集団生活が厭になって、仲間から離れて独りで静かにしていたいと思う変わったのがある。そういうのがつまり孤猿だ」

『孤猿』の中の一節

代　表　作　品

著　書　名	刊　行　年
詩　北国（カマイタチ）	1958（昭和 33）年
星蘭干	1990（平成 2）年
自伝的小説	
あすなろ物語	1953（昭和 28）年
しろばんば	1960（昭和 35）年
わが母の記	1975（昭和 50）年
小説　猟銃	1949（昭和 24）年
闘牛	同上
黯い潮　氷壁	1950（昭和 25）年
歴史小説	
天平の甍	1957（昭和 32）年
敦煌	1959（昭和 34）年

1936（昭和 11）年、「サンデー毎日」の懸賞小説で入選し、それが縁で毎日新聞社大阪本社に入社、1945（昭和 20）年 8 月 15 日の終戦の日には新聞記者として“玉音ラヂオに拝して”というトップ記事を書いた。

文壇へのデビューは 40 代と遅かったが、1950（昭和 25）年に『闘牛』で第 22 回芥川賞を受賞、自伝的なものをはじめ現代もの、歴史ものなど数多くの作品を世に出し、数々の賞を受賞した。

【やなぎた　くにお】

柳田国男

１８７５（明治８）年～
１９６２（昭和３７）年

「日本民俗学の父」と言われた民俗学者であり、作家でもある。
少年時代からたいへんな読書家であった。
日本中をめぐり、各地に伝わる伝説など掘り起こした。
飯田には柳田家の墓があり何度も訪れているが、豊橋にも数回訪れている。

柳田国男
成城大学民俗学研究所所蔵

窮乏時代

柳田国男は、兵庫県の小さな村で3代にわたって医を家業とする松岡家で父操、母たけの六男として生まれた。父は医師、儒者、師範、宮司などを務めた立派な人であったが、家は貧しく、飢饉もあり非常な貧困を経験した。13歳のとき、茨城県布川の地蔵堂で「間引きの絵馬」（貧しさゆえに自分の生んだばかりの子どもを殺さなければならない母親の姿を描いた絵馬）を見てショックを受け、このときの体験から、国男は「人々を貧しさから救いたい」という気持ちが強くなり、そのための勉強をしたいと考えるようになったといわれている。

飯田市美術博物館内に移築された柳田館

医者となっていた二人の兄のところに身を寄せながら、第一高等学校、東京帝国大学法科大学政治科に進み、卒業後は農商務省農務局に勤務するようになった。そして、26歳のとき旧飯田藩士柳田家の養嗣子となることが決まった。

信州や三河にも

1898（明治31）年8月、国男は約1か月間渥美半島の伊良湖岬に滞在した。9月上旬には、友人である田山花袋が訪ねてきて同宿したとされている。

このとき、椰子の実を見つけたことを東京に戻ってから島崎藤村に話したところ、藤村が大いに気に入り、それをもとに作られた詩が「椰子の実」である。（『海上の道』より）

また、伊良湖で見聞したことを「伊勢の海の清き渚に遊び、類（たぐい）無き夕凪夕月夜の風情を身に泌（ひ）め、物悲しき千鳥の馨に和して、遠き代の物語の中に辿り入らんとならば、三河の伊良湖岬に増したる處は無かるべし。」で始まる『遊海島記』に詳細に記している。

伊良湖岬にある島崎藤村、柳田国男共作ともいわれる「椰子の実」の詩碑

この頃、東京の五番町快楽亭で開かれていた文学

会などに、小栗風葉や田山花袋らが出席していて交流があり、特に田山花袋とは親交が深かった。

農商務省の役人だった国男は、精力的に日本各地を講演旅行などで回っているが、その数はおよそ 120 回にも及ぶとされ、特に信州は柳田家の地元でもあるため、たびたび（20 数回）訪れている。その中で、南信州や三河を訪れた主なものが下表である。

- 1901（明治 34）年、長野県へ約 40 日間の講演旅行、このとき飯田では産業組合に関する講演を行う。180 名の聴衆が参加するほどの盛況であった。
- 1905（明治 38）年、愛知県下を旅行し、水利組合を見てまわった。三河から遠江の引佐郡、磐田郡、安倍郡を回る。
- 1920（大正 9）年、島田、掛川を経て三ケ日、豊橋、名古屋などを旅行する。
- 1926（大正 15）年、新野の盆踊りを見学する。
- 1930（昭和 5）年、北設楽郡本郷町中在家の花祭りの実演を見学する。
- 1933（昭和 8）年、豊橋市の狭間小学校で「地名と歴史」を講演する。
- 1934（昭和 9）年、信州旅行の帰途、北設楽郡津具村の山崎宅へ泊まる。

国男は、『東国古道記』の中の「遠江と信濃との連絡」「信州から出て来る路」「秋葉と遠山道」「天龍川峡谷への交通」などの章で、信州と近隣の地域を結んでいた路について詳細に述べている。

国男は、実際にそこへ出かけていき。見聞したことや資料をひも解いてわかったことなどをもとに、その路の果たしていた役割や意義などについて考究している。

また『信州随筆』の中で、信州が「信濃柿」や「信濃桜」をはじめ信仰や民間文芸など、全国への輸出元であると述べている。また「新野の盆踊」についても「新野の盆踊の目立った特色は、扇を盛んに使うことと、太鼓その他の楽器類を、ちっとも用いないことであった。」など国男がその場で体験してわかったことが詳細に記されている。

『定本柳田国男集第二十二巻』
柳田国男／著　筑摩書房／発行

代　表　作　品

著　書　名	刊　行　年
近世奇談全集	1903（明治 36）年
萩の古枝	1905（明治 38）年
遠野物語	1910（明治 43）年
雪国の春	1928（昭和 3）年
遊海島記	1930（昭和 5）年
秋風帖	1932（昭和 7）年
東國古道記	1952（昭和 27）年
故郷７０年	1958（昭和 33）年
定本柳田国男集	1961（昭和 36）年
	～
海上の道	同上

膨大な数の著作物

『定本柳田国男集』全 31 巻には、470 を超える著作が収められており、一生涯にいかに多くの著作を発表したかが窺われる。その業績は、これら数多くの著作から日本民俗学への理論や方法論を提示し、初めて学問として確立させたことである。

なかでも、「此話はすべて遠野の人佐々木鏡石君より聞きたり。昨明治四十二年の二月頃より始めて夜分折々訪ね来り此話をせられしを筆記せしなり。」で始まる遠野物語は、柳田国男の代表的な作品となっている。

【 むく　はとじゅう 】

椋鳩十

１９０５（明治３８）年～
１９８７（昭和６２）年

信州喬木村が生んだ児童文学作家。
『大造じいさんとガン』をはじめ、全国の教科書に取り上げられている動物物語が数多くある。
「お母さんの声は金の鈴」といって「母と子の20分間読書運動」を推進し、1972年（昭和47）年読書運動により文部大臣賞受賞。

椋　鳩十
喬木村椋鳩十記念館所蔵

生い立ち

椋鳩十は、長野県下伊那郡喬木村阿島に父金太郎、母たきの二男として生まれた。本名は、久保田彦穂といった。少年時代は南アルプスの伊那谷で育ち、飯田中学校を経て法政大学に進み、卒業後鹿児島の中種子高等小学校の教員となった。しかし２か月ほどで同県の加治木高等女学校に変わってからは、教職と同時にペンネーム「椋鳩十」としての文筆活動を行っていた。

ジャック・ロンドンの『南海物語』に感銘を受け、南洋に憧れたことと、姉が鹿児島で医師をしていたこともあって鹿児島で暮らすようになったが、故郷の南アルプスがなつかしく、山の生活を想起させる作品を多く手がけた。

『人間・出会いのすばらしさ』
椋鳩十／著　あすなろ書房／発行

そんな少年時代の南アルプスの山歩き体験から野生動物に関心を抱くようになり、1938（昭和13）年、雑誌「少年倶楽部」に動物小説『山の太郎熊』を発表、その後次々と動物を中心に描いた名作を生み出し、児童を対象とした動物文学の礎を築いた。また、『大造じいさんとガン』は、狩人のじいさんとがんの群れの頭領である残雪との戦いを描いた作品であるが、描かれている登場人物の心情表現はもちろん、情景描写も優れており、子どもたちに感銘を与えるものとなっている。

動物文学を大成

1950（昭和25）年に出版された『片耳の大シカ』は文部大臣奨励賞を受賞し、検定教科書に採用されるなど、動物作家としての地位は不動のものとなった。

「私は昭和13年に動物物語をね、二十ばかり書きました。そしたらすぐレッテルをはられた。人間という奴はね、良いレッテルをはられるといい

喬木中学校校門横に建てられている「感動は人生の窓を開く」の句碑

喬木村にある椋鳩十の墓碑

けど、変なレッテルをはられた場合にはね、えらい目にあいますよ。レッテルどおりに歩かされるというのは、レッテルのもつひとつの特異性ですな。」鳩十は、『お母さんの声は金の鈴』の冒頭でそんなふうに述べている。これは、動物作家として長年書き続けることの大変さが窺える言葉である。

読書活動を推進

「<椋先生の講演は、なんど聞いてもいつも新鮮で感動的だ>という声は、あちこちでよく聞かされた。野武士のような、一種独特な風貌と、信州訛りの、ゆったりとした言葉で訥々（とつとつ）と語る椋さんの話には、つねに人の心をほのぼのと包みこむ優しさと暖かさにあふれていた。」これは、たかしよいちが著した『人間・出会いのすばらしさ』に添えられた言葉である。

鳩十は、図書館活動に熱心であった。その活動が認められ、南日本文化賞（1955年）、西日本文化賞（1958年）を受賞しているほどである。

1947（昭和22）年鹿児島県立図書館長となり、「母と子の20分間読書運動」を推進し、全国に広めようと日本各地を講演して回った。そうした間にも数々の優れた作品を残した。

故郷喬木村とのつながりは深く、事あるごとに訪れていたが、1978（昭和53）年に鹿児島女子短期大学教授を退任してから、翌年に喬木村阿島に別荘を建て、夫妻同伴で夏を過ごすこともあった。飯田市や喬木村で小中学生やPTA、教師、市民など各団体に向けてさまざまな講演を行ったが、どの講演も鳩十の人柄の滲み出た心暖まる内容であったという。

1987（昭和62）年には、NHK教育ＴＶ「シリーズ授業」で母校喬木第一小学校五年生に「生きものはすばらしい」のテーマで授業を行い、全国放映された。このとき別に行った講演「少年の日の感動」が、母校での最後の講演となった。

椋鳩十は今、南アルプスの谷間にあるなつかしいふるさと喬木村に眠っている。（上写真）

【受賞作品】

『大空に生きる』小川未明文学奨励賞
『孤島の野犬』
サンケイ児童出版文化賞
国際アンデルセン賞国内賞
『マヤの一生』
第一回赤い鳥文学賞、
児童福祉文化奨励賞
『モモちゃんとあかね』赤い鳥文学賞
『椋鳩十の本』など文学界への貢献
第三十三回芸術選奨文部大臣賞

代　表　作　品

著　書　名	刊　行　年
山窩調	1933（昭和 8）年
大造じいさんとガン	1941（昭和16）年
月の輪熊	1942（昭和17）年
片耳の大シカ	1950（昭和25）年
大空に生きる	1961（昭和36）年
孤島の野犬	1963（昭和38）年
マヤの一生	1970（昭和45）年
モモちゃんとあかね	1971（昭和46）年
におい山脈	1972（昭和47）年
ネズミ島物語	1973（昭和48）年
にせものの英雄	1977（昭和52）年

その他の主な作家たち

【すぎうら　みんぺい】
杉浦明平　１９１３（大正２）年～２００１（平成１３）年

愛知県渥美郡福江町（現田原市）に生まれ、愛知県立第四中学校（現時習館高校）を経て、第一高等学校在学中に歌誌「アララギ」に属し、歌人として出発した。東京帝国大学在学中に立原道造らと同人雑誌「未成年」を創刊、卒業後は原典によるイタリア・ルネサンスの研究を志した。

1945（昭和20）年以後郷里の渥美町に定住し、農業をしながら作家・評論活動を続けた。日本共産党に入党した時期があり、1955（昭和30）年から渥美町議を2期務めたり、教育委員も務めたりした。このときの経験から、新スタイルのルポルタージュ文学が生まれた。

のち作家活動に専念し、歴史小説、評論、エッセイと幅広く活動した。（『作家・小説家人名事典』より）

代表作品
- ノリソダ騒動記
- 田園組曲
- ルネッサンス文学の研究
- 戦国乱世の文学
- 小説渡辺崋山
- ミケランジェロの手紙
- チボリーノの冒険
- 犬と五人の子どもたち

【たけだ　ゆきお】
武田雪夫　１９０２（明治３５）年～１９６４（昭和３９）年

愛知県豊川市国府町に生まれた童話作家で、愛知県立第四中学校（現時習館高校）在学中「赤い鳥」に童謡を投稿、1919（大正8）年9月号より計5編が掲載された。『ブラツシ』は「溌溂とした感触」がありブラシが生きて動いていると北原白秋に称賛されたという。

立教大学に進んでからは童話創作を始め、おもに幼年童話に力を注いだ。戦前は、「幼年倶楽部」「少女倶楽部」「コドモノクニ」ほかに作品を発表。幼年向けの『スズメ』『ナカヨシコドモ』など、小さい生き物への愛護や、他国の子どもとの友情をテーマに、愛の心を育もうとする作品を書いた。

戦後も引き続き、多くの幼年童話を書いたが、その作品は、子どもの生活に即した身近な素材の中に、子どものやさしさ、素直さ、正しさが織り込まれている。（『日本児童文学大事典』より）

代表作品
- 踏切ごっこ
- スズメ
- ナカヨシコドモ
- やさしい科学のお話
- 思ひ出の歌時計
- ぎんのこすず
- たからもの
- あわてろばさん
- チロものがたり

【つつい　としお】
筒井敏雄　１９０５（明治３８）年～１９８３（昭和５８）年

愛知県北設楽郡設楽町に生まれ、本名を七原敏雄といった。1907（明治40）年、実父が急逝したため、同村の筒井家の養子となった。

田峯尋常高等小学校卒業と同時に義兄を頼って上京し、小説家

を志した。その後小山内薫に師事し創作に打ち込んだが、途中兵役でしばらく活動を休み、1929（昭和4）年再び上京して、郷土の先輩尾崎士郎を師と仰ぐこととなった。

児童文学作品も手がけており、児童文学協会を設立、理事にも選出された。郷土を愛し、たびたび帰郷して作品の構想を練っていたといわれる。その作品『山の波紋』の中には、郷里田峯の風景を描写した一節がみられる。（『作家・小説家人名事典』『ふるさとの文学』より）

代表作品

酒徒菩薩
開花一族
魔笛
白梅小梅
小サイヘイタイサン
そろそろ曽呂利さん
日本むかし噺
山の波紋
昇天太閤記

【ひなつ　こうのすけ】

日夏耿之介　１８９０（明治２３）年～１９７１（昭和４６）年

長野県下伊那郡飯田町（現飯田市）に生まれ、本名を樋口圀登といった。飯田尋常高等小学校、飯田中学校をへて、1908（明治41）年早稲田大学在学中に西条八十らと「聖杯」を創刊して詩作を発表し、その後『転身の頌』を刊行した。

象徴詩人として活躍する一方、早稲田大学教授を務め、翻訳、評論と幅広く活動した。著書も多いが、その作品はかなり難解で読みこなすのには教養と忍耐が必要といわれた。しかし、峻嶮（しゅんけん）な山に囲まれた信州人のせいか、決して世俗に屈しないで理想に向かって突き進むという誇り高き志の人であったという。

読売文学賞や、芸術院賞、毎日出版文化賞など数多くの賞を受賞し、飯田市民名誉市民に選ばれた。1956（昭和31）年、病をえて飯田市に居住した。現在、飯田市内にはリンゴ並木通りの詩碑をはじめ十数か所に文学碑が存在する。（『詩歌人名事典』『信州の近代文学』より）

代表作品

転身の頌
ワイルド詩集
黒衣聖母
明治大正詩史
呪文
鴎外文学
文人画風
近代日本詩史論
明治大正の小説家
日夏耿之介全詩集

【ふじえだ　しずお】

藤枝静男　１９０７年（明治４０年）～１９９３年（平成５年）

静岡県志太郡藤枝町（現藤枝市）で生まれ、後に浜松市田町に住み眼科医を開業しながら執筆活動もこなした作家である。第八高等学校（現名古屋大学）時代の友人や「近代文学」の仲間たち、多くの芸術家たちと交流を深めるなかで、自らの文学理論を築き、独自の文学世界を作り上げていった。

私小説作家を自称し、『空気頭』が芸術選奨文部大臣賞、『田紳有楽（でんしんゆうらく）』が谷崎潤一郎賞、『悲しいだけ』が野間文芸賞など受賞歴は多い。その作品は、天竜川周辺の風景が好きで、浜名湖の風物を愛し、浜松地方の風土への愛着強く独自の審美観で描かれているものが多い。（『作家・小説家人名事典』より）

代表作品

空気頭
厭離穢土
田紳有楽
庭の生きものたち
悲しいだけ
みんな泡
虚懐

描かれたふるさと

井沢（いざわ）　純（じゅん）／著『僕のカンディード』

1925（大正14）年東京に生まれ、東京大学文学部を卒業。戦後豊橋で教員となり、豊橋東高校を最後に東京へ戻った。『僕のカンディード』は、著者が東高校の教員時代に刊行された作品である。

「終戦直後、豊橋近郊に復員して、１年後市内の中学校に職を得てからは、毎日復興途上の町並を歩いて学校に通った。当時豊橋随一の景観は、何と言っても焼け落ちた飯田線終着駅のコンクリートの残骸であった。ことに背後に沈む陽の最後の輝きをうけて、茜色の空にそそり立つ灰色の膚を見上げる時僕はゴチック寺院に対するが如き畏敬讃嘆の念を禁じ得なかった。」

田山花袋（たやまかたい）／著『田山花袋の日本一周前編』

1871（明治４）年栃木県邑楽郡館林町（現群馬県館林市）に生まれた。早くから漢詩文を学び、1886（明治 19）年上京してのち尾崎紅葉に入門、日本自然主義の代表的な作家となった。『日本一周』は、日本全国を描いた前篇・中篇・後篇からなる紀行文である。

「豊橋の町の気分は一体に素朴で、三河特有の風俗をいまだに存している。尾張あたりの都会の関西風になったのとは全く趣を異にしている。その証拠には昔の祭礼の風などが今でもちゃんと残っている。三河万歳は此処の附近の稲村という処が本場である。」

瀬戸内晴美（せとうちはるみ）／著『田村俊子』

1922（大正11）年、徳島県徳島市で生まれた。東京女子大学在学中に結婚して中国に渡ったが、北京から引揚後離婚して創作活動に入った。1956（昭和 31）年、『女子大生・曲愛玲』で新潮同人雑誌賞、1961（昭和 36）年『田村俊子』により伝記文学に新局面を開き第１回田村俊子賞を受けた。その中の「豊橋行」に豊橋のようすが描かれている。

「豊橋に着いた時、灯の色はすっかり夜になっていた。初めての町の駅へ夜になって降り立った時にいつでも感じる、うそうそしたわびしさが私に襲いかかってくる。」

城山三郎（しろやまさぶろう）／著『イチかバチか』

1927（昭和２）年愛知県名古屋市生まれ、本名杉浦英一。東京商科大学（現一橋大学）卒業後、愛知学芸大学（現愛知教育大学）の助手となり、後専任講師となったが、１０年後退職した。この間に、『輸出』で文学界新人賞、『総会屋錦城』で直木賞を受賞し、経済小説というジャンルを成立させた。

「大田原が約束した通り、二つ目の停車駅である豊橋で下りた。下りる直前、大田原はチョビひげをしごきながら、恐縮したように言った。（中略）ベルが鳴り出した。豊橋は三十秒停車である。ためらっている中に、ドアが閉まってしまう。」

夏目漱石（なつめそうせき）／著『三四郎』

1867（慶応3）年東京生まれ、本名金之助。東京帝国大学卒業後、徳島市の松山中学、第五高等学校（現熊本大学）などで教職についた。イギリス留学後、東京帝国大学で英文学の講義を始めたが、処女作『我輩は猫である』を発表し、作家活動に入った。

「浜松で二人とも申し合わせた様に弁当を食った。食ってしまっても汽車は容易に出ない。窓から見ると、西洋人が四五人列車の前を往ったり来たりしている。其のうちの一組は夫婦と見えて、暑いのに手を組み合わせている。女は上下とも真白な着物で、大変美しい。三四郎は生まれてから今日に至るまで西洋人というものを五六人しか見た事がない。」

山田風太郎（やまだふうたろう）／著『戦中派不戦日記』

1922（大正11）年兵庫県養父郡関宮町（現養父市）で生まれ、本名は山田誠也。幼くして父母を失い、親戚の間を転々とする少年時代を送る。1944（昭和19）年東京医科歯科大学に入学し、在学中『達磨峠の殺人』が「宝石」の懸賞小説に入選して作家デビューした。本格推理ブームを生み、『甲賀忍法帖』で忍法ブームを起こした。

「九月一日（土）〇午後飯田駅にゆき、切符を求め、蒲団をチッキで送り出す。剣なき兵、窓口に顔出し、「兵隊だがねえ、切符一枚売ってくれい」と、今まで通りやり、駅員にさんざんどなりつけられる。「兵隊？兵隊かなんか知らんが、まさかもう公用じゃあるまい。公用じゃなければ一般といっしょにならんでもらいたい」

参考資料一覧

書　名	著　者	発　行	請求記号
愛知に輝く人々4	愛知県小中学校長会／編	愛知県教育振興会	A280/47ァ/4
愛知に輝く人々10	愛知県小中学校長会／編	愛知県教育振興会	A280/47/10
或る年の冬　或る年の夏	藤枝　静男／著	講談社	913.6/ﾌ-97
伊勢拜み峠	筒井　敏雄／著	富士	A930/3
イチかバチか	城山　三郎／著	朝日新聞社	913.6/ｼ-72
伊那路	腰原　智達／編 長野県国語国文学会／監修	一草舎出版	N940/イ
井上靖	巌谷　大四／著	保育社	910.26/ｲﾉ
群像日本の作家20　井上靖	高橋　英夫／他著	小学館	910.26/ｲﾉ/20
井上靖青春記	佐藤　英夫／編著	英文堂書店	910.26/ｲﾉ
井上靖　生誕百年	豊橋市図書館／編	［豊橋市図書館］	A289/706
井上靖と豊橋	豊橋市図書館／編 谷　彰／著	［豊橋市図書館］	A902/112
井上靖評伝覚	福田　宏年／著	集英社	910.26/ｲﾉ
伊良湖崎の文人・墨客	渥美町郷土資料館／編	渥美町郷土資料館	A225/58
江戸川乱歩と13人の新青年〈論理派〉編	ミステリー文学資料館／編	光文社	913.6/エ
絵葉書のなかの豊橋	豊橋市二川宿本陣資料館／編	豊橋市二川宿本陣資料館	A224/275ア
大阪圭吉探偵小説選	大阪　圭吉／著	論創社	913.6/オオ
お母さんの声は金の鈴	椋　鳩十／著	あすなろ書房	9146/ムク
小栗風葉作品集	小栗　風葉／著	小栗風葉をひろめる会	A902/105ア
小栗風葉資料集	陸井　清三／編著	稲垣　惣司	A902/64
小栗風葉資料集成	遠藤　一義／編著	小栗風葉をひろめる会	A902/109
書かれた豊橋	豊橋市図書館／編 豊橋市文化協会／編	［豊橋市図書館］	A902/118
賀川豊彦を知っていますか	阿部　志郎／著 雨宮　栄一／著	教文館	289.1/カ
悲しき配分	鷹野　つぎ／著	不二出版	367/ソ20
感動は心の扉をひらく	椋　鳩十／著	あすなろ書房	9146/ムク
聞き書き・椋鳩十のすべて	本村　寿一郎／著	明治図書	909/キ
凶徒津田三蔵	藤枝　静男／著	講談社	9136/フ56
郷土作家　大阪圭吉展	愛知県立時習館高等学校図書館／編	［愛知県立時習館高等学校図書館］	A902/9
現代日本詩人全集第11巻	三好　達治／他著	東京創元社	911.56/124/11
孤猿	井上　靖／著	河出書房	913.6/イ21
ここに家郷あり	大阪　圭吉／著	新興亜社	913/11
子供と母の領分	鷹野　つぎ／著	古今書院	599/24
佐々木味津三年譜・作品年表	津具村教育委員会／編	津具村文化資料展示センター	A902/61
作家・小説家人名事典	日外アソシエーツ株式会社／編	日外アソシエーツ	910/サ
サバト恠異帖	日夏　耿之介／著 井村　君江／編	筑摩書房	904/サ
三四郎	夏目　漱石／著	旺文社	913.6/ナツ
詩歌人名事典	日外アソシエーツ株式会社／編	日外アソシエーツ	911/シ
詩集　幼年　丸山薫	丸山　薫／著	四季社	911.56/ヨ
静岡の作家群像	山本　恵一郎／著	静岡新聞社	910.2/シ
静岡県と作家たち	静岡近代文学研究会／編	静岡新聞社	910.26/シズ
死線を越えて	賀川　豊彦／著	ＰＨＰ研究所	913.6/カガ
しろばんば〔正〕	井上　靖／著	中央公論社	9136/イノ
信州の近代文学	東　栄蔵／編	信濃毎日新聞社	N902/シ
新編大衆文学名作全集9	佐々木　味津三／著	河出書房	913.6/サ/9
新編大衆文学名作全集10	佐々木　味津三／著	河出書房	913.6/サ/10
人物書誌大系10　丸山薫	藤本　寿彦／編	日外アソシエーツ	A902/43
杉浦明平を読む	別所　興一／著 鳥羽　耕史／著	風媒社	A902/120
過ぎ去りし日日	井上　靖／著	日本経済新聞社	910.26/イノ
青春の賀川豊彦	雨宮　栄一／著	新教出版社	289.1/カ
戦中派不戦日記	山田　風太郎／著	番町書房	915.6/セ
叢書『青鞜』の女たち第20巻	鷹野　つぎ／著	不二出版	367/ソ/20
大衆文学大系12	佐々木　味津三／著	講談社	913.6/タ-168/12

書　名	著　者	発　行	請求記号
鷹野つぎ	〔鷹野　つぎ／原著〕 東　栄蔵／編著	銀河書房	9186/タ
鷹野つぎ著作集第2巻	鷹野　つぎ／著	谷島屋	S936/タ/2
田村俊子	瀬戸内　晴美／著	文芸春秋新社	910.26/181
田山花袋と柳田国男	渥美町郷土資料館／編	渥美町郷土資料館	A289/613
田山花袋の日本一周前編	田山　花袋／著	東洋書院	915.6/タ/1
第一小説集『死の快走船』覚え書き	杉浦　俊彦／著	杉浦俊彦	A902/24
筒井敏雄作品集	筒井　敏雄／著	七原栄美代	A980/6ア
定本　柳田国男集第二十二巻	柳田　国男／著	筑摩書房	380/ヤ/22
東三郷土第四号（2000年秋）	山田　久次／編	豊川堂	A220/34イ/4
東三文化第十一号（2004年春）	山田　久次／編	豊川堂	A220/34イ/11
『遠野物語』を読もう	藤井　隆至／著	新潟日報事業社	382/ト
豊橋中部教会六十年略史	岡本　繁男／編	日本基督教団豊橋中部教会	A190/5
豊橋の文学碑　ガイドブック	豊橋市中央図書館／編	豊橋市中央図書館	A902/60ア
長野県文学全集第４期　詩歌編　第４巻	伊藤　左千夫／他著	郷土出版社	N980/ナ
夏草冬涛	井上　靖／著	新潮社	9136/イノ
日本キリスト教歴史大事典	日本キリスト教歴史大事典編集委員会／編	教文館	190/ニ
日本キリスト教史における賀川豊彦	賀川豊彦記念松沢資料館／編	新教出版社	289.1/カ
日本現代小説大事典	浅井　清／編　佐藤　勝／編	明治書院	910.26/ニ
日本児童文学大事典第１巻	大阪国際児童文学館／編	大日本図書	909/ニ/1
人間・出会いのすばらしさ	椋　鳩十／著	あすなろ書房	9146/ムク
旗本退屈男	佐々木　味津三／著	実業之日本社	913.6/サ
浜松市史三	浜松市役所／編	浜松市役所	S236/ハ
浜松文学散歩展	浜松市立中央図書館／編	浜松市立中央図書館	904/ハ
一粒の麦	賀川　豊彦／著	賀川豊彦『一粒の麦』を再版する会	A936/96ア
評伝小栗風葉	岡　保生／著	桜楓社	A902/8
ひらがな童話集	武田　雪夫／著	金の星社	913.8/ヒ
ふるさとに残る　椋鳩十名言秀句集	長野県喬木村教育委員会／編	長野県喬木村教育委員会	N902/フ
ふるさとの文学　愛知	中西　達治／他著	文京書房	910.2/131/3
ふるさとの文学	山田　久次／著	東海日日新聞社	A902/110ア
ふるさとの文学　静岡	高杉　一郎／他著	文京書房	A902/13
ふるさとの椋鳩十	喬木村教育委員会／［編］ たかし　よいち／他著	喬木村教育委員会	N289/フ
ふるさと文学館第24巻	今西　幹一／編	ぎょうせい	N980/フ
ふるさと文学館第26巻	藤沢　全／編	ぎょうせい	S980/フ
僕のカンディード	井沢　純／著	北斗工房	913.6/イ105
丸山薫詩集	丸山　薫／著	昭南書房	911.56/マ
丸山薫詩集　帆・ランプ・鴎	丸山　薫／著	長谷川巳之吉	911.56/ホ
丸山薫追悼号	近藤　芳朗／他編	中日詩人会	A902/101
三河の旗本退屈男	佐々木　味津三／著	春夏秋冬叢書	A936/79ア
三河と賀川豊彦	鈴木　貞男／編	賀川豊彦『一粒の麦』を再版する会	A902/114
ムカシバナシ	武田　雪夫／著	児童の友社	913.8/ム
椋鳩十の世界	たかし　よいち／著	理論社	909/ム
椋鳩十文学の研究	阿部　真人／著	大日本図書	909/ム
ヤゴの分際	藤枝　静男／著	講談社	913.6/フ-58
柳田国男	渥美町郷土資料館／編	渥美町郷土資料館	A380/36
柳田国男写真集	大藤　時彦／編 柳田　為正／編	岩崎美術社	289.1/ヤ
柳田国男伝別冊	柳田国男研究会／編	三一書房	2891/ヤ/2
柳田国男と信州	胡桃沢　友男／著	岩田書院	382/ヤ
柳田国男と飯田	柳田国男記念伊那民俗学研究所／編 片桐　みどり／他執筆	飯田市教育委員会	N289/ヤ
山の波紋	筒井　敏雄／著	集英社	A936/1
夕やけ色のさようなら	椋　鳩十／著	理論社	9146/ムク

【資料提供】　（敬称略）
鈴木壮太郎、長谷川勝義、喬木村椋鳩十記念館、設楽町教育委員会、浜松市立高校、成城大学民俗学研究所、豊橋市美術博物館